

先週私たちは、エペソにおけるアポロとパウロの働きについて見ました。パウロは、エペソで十二人の弟子たちに会いますが、彼らは「ヨハネのバプテスマ」しか知りませんでした。それゆえに、ヨハネが悔い改めのバプテスマを受けた理由をパウロは彼らに教えるのです。つまり、それは、ヨハネではなく、彼の後に来られる主イエスを人々が信じるためでした。そのようにして彼らは、主の御名によるバプテスマを受けるのです。そして、パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言や預言をしたりしました。

さて今日もその続きを見ていきますが、ここにはエペソでのパウロの働きが続けて記されています。8-9 節「それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。9 しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた」。

以前エペソを訪れた時には、人々の要求にも関わらず、「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言ってパウロはそこを後にしたわけですが、再びこの地に戻ってきた時には、彼は約三年もの間、そこに滞在します。そして、これまでしてきたように、彼は会堂でみことばを語るのです。それが「三ヶ月の間」とありますから、それなりの期間であったと言えます。ところが、ここにも、心をかたくなにするユダヤ人たちがいました。彼らは「この道」、つまり、主の福音を会衆の前でののしるのです。

それに対するパウロの応答については、9 節の途中、「パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退けて、毎日ツラノの講堂で論じた」。ののしる者たちに対して、パウロは、やり合うことはしませんでした。かえって、自分も、また弟子たちをも退かせることで、みことばを語る場を「ツラノの講堂」に移すのです。「ツラノの講堂」とは、ツラノという人が持っていた講堂と考えられますが、パウロは、その空き時間（おそらく午前 11 時-午後 4 時までの当時の人々の休憩時間）に、そこを借りて、毎日みことばを教えていたようです。

その結果、10 節「これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた」。二年間とは、コリントでの一年半の滞在よりも長いわけですが、そのようにパウロがエペソでみことばを語り続けた結果、アジアに住む人はみな、主のことばを聞きました。というのも、このエペソには、アジア州全域から、人々が通商のため、またアルテミス神殿参拝のためにやって来たからです。ヨハネ黙示録に出て来るアジアの 7 つの教会を含む諸教会の基礎は、そのようにして作られたと考えられています。

またパウロをして、二年以上もの間、同じ町でみことばを語り続けることができたのは、そこで大きな迫害が起こらなかったからとも言えるでしょう。確かに主の道をののしる者はいましたが、パウロに直接危害を加える者はいなかったようです。でも、コリントの時のように、その後、問題が起こります。「ただならぬ騒動」と聖書には出てきますが、それは、パウロを通して信じ救われた人々のうちで、その生き方にも変化が生じることで、反対者たちの不満も溜まっていったことが理由として考えられます。

そのことについては、また次回見ますが、でも、今日のところでは、パウロがエペソで語り続けた結果、その住民はみな、主のことばを聞いたのです。その数がどれだけであったかはわかりませんが、でも 17 節には、「エペソに住むユダヤ人とギリシヤ人がみな、主イエスの御名をあがめようになった」とも記されています。それは、エペソの人々をして、全員が主を信じて、弟子となったわけではないですが、彼らがそのように主の御名をあがめるようになった理由が、11 節以降に記されています。

11-16 節「神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行われた。12 パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。13 ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈祷師の中のある者たちも、ためしに、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をととなえ、『パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる』と言ってみた。14 そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。15 すると悪霊が答えて、『自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ』と言った。16 そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押さえつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した」。

神様は、みことばを語るパウロの手によって驚くべき奇蹟を行われました。それによって、みことばの力を主は証されたのです。その内容については、主イエスがしておられたこと、また使徒たちがしていたことと基本的に同じといえます。つまり、神様は、パウロを通して人々から病を去らせ、悪霊を追い出されたのです。そして、もちろん、それを経験した人や周囲の人々は、主の御名をあがめるようになったと思います。

でも、そのような書き方はここではされていません。代わりに、パウロが行っていたことを知り、それを真似てみることで、ひどい目に遭った人々のことが記されているのです。エペソの人々が、恐れを感じて、主の御名をあがめるようになったのは、そのことを聞いたから、つまり、「ユダヤ人の魔よけ祈祷師たちが、悪霊に打ち負かされた」ということを聞いて、恐れを感じて、彼らは主の御名をあがめるようになりました。

「ユダヤ人の魔よけ祈祷師」と聞いて、どんな人をイメージしますか？これまで見てきた中では、サマリヤに魔術師シモンという人がいました。またキプロス島では、バルイエスという人もいました。この人々も彼らのように、魔術師であったのでしょうか？この魔よけ祈祷師について、注解では「悪霊を追い出す祈祷師」とありました。普段彼らは、誰かの名を用いて悪霊を追い出していたようですが、この時は、パウロが行っているのを真似て、「ために」主の御名をとらえたというのです。つまり、彼ら自身は主を知らず、信じてもないのに、それを何か力のように考えることで、彼らは主の御名を使おうとしました。

すると、悪霊はこう答えます。「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ」と。英語では“Jesus I know, and Paul I recognize, but who are you?”。なぜこの悪霊は、魔よけ祈祷師たちのことを知らなかったのか？果たしてそれはどういう意味なのでしょう？考えられることは、この悪霊は、彼らのことを脅威に思っていなかった、つまり、眼中になかったということです。なぜなら、悪霊は、主の御名を使った祈祷師たちに従うどころか、彼らに襲いかかり、傷を負わせたからです。

このことがエペソ中に知れ渡ることで、人々は恐れを感じて、主の御名をあがめるようになったわけですが、ちなみに、そのようなことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちでした。この「スケワ」については何も知られていません。でも、彼がユダヤの祭司長であったという所からして、ある程度、名の知れた人物であったことが推測できます。また彼らが、祭司長の息子たちであったという所からして、悪霊は当然彼らのことを知っていて、彼らに従うことを普通ならイメージすると思うのです。彼らが、神の選びの民であり、その中の魔よけ祈祷師たちであったからです。

でも、悪霊は、彼らのことを知らなかった。だから、従うどころか、彼らを襲って打ち負かしたわけですが。このことは、とても大切なことを教えていると思います。いかがですか？もしあなたが、同じことを試みたとして、悪霊は、「あなたのことを知っている」と言うと思いますか？主への信仰のゆえに、悪霊は、あなたのうちに主イエスを見、主があなたとともにおられることを認めると思いますか？

それが病であれ、悪霊であれ、なぜパウロはそれを去らせることができたのでしょうか？彼自身のうちに、そのような力があったからですか？それとも、彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けに、そのような力が宿っていたからでしょうか？この手紙の著者ルカが、ここで明らかにしていること、それは神様が行われた、ということです。驚くべき奇蹟を行われたのは、神様であって、神様がパウロの手によって、つまり、彼を用いられたので、病は去り、悪霊は出て行きました。ですから、悪霊は、神様を知っているゆえに、神であられる主イエスと、その主への信仰によって、主と一つにされ、主と共に歩んでいる者を認識すると言えるのです。

ということは、やはりここでも主イエスへの信仰が問われています。それは私たち自身の強さや正しさではないのです。なぜなら、私たちは、正しくない者だからです。いくら自分を強いと思っても、誰も自分で自分を救うことのできない弱い存在、その自己中心さ、罪ゆえに、すべての人が滅びに至るべき存在なのです。ですから、そんな自分を正しい者かのように、まるで強い者であるかのように装っても、それは意味のないこと、むしろ、この出来事を通して、信仰に入ったエペソの信仰者たちから、私たちは学ぶべきです。

17-19 節「このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。18 そして、信仰に入った人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。19 また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった」。

主を信じたエペソの人たちは、自分たちのしていること、つまり、罪と示されることを告白しました。おそらくそれらは魔術的なものとの関係があったと思われますが、彼らは、悪霊が知っているという主イエスを信じることで、自分たちの罪を告白したのです。また、特に魔術にのめり込んでいた人たちは、その書物をみなの前で焼き捨てました。その値段は、銀貨五万枚、約三百万円相当とも言われますが、そのことから、エペソの人々が、いかに悪の力の虜になっていたかが伝わってきます。でも、その分、印刷機のない時代に、それらの書物を焼き捨てたという行為は、古い生き方との決別を意味していたとも言えるでしょう。

主を信じる者たちが、そのように罪を告白し、古い生き方を捨てて行った時、主のことばはいよいよ力をもって広がっていきます。20 節「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った」。いかがですか？もう一度お尋ねしますが、あなたの主への信仰は、悪霊にも認められるものだと思いますか？それゆえに、主からあなたを引き離そうと、あらゆる攻撃をしかけている悪魔の存在に、あなたは気づいていませんか？つまり、この世にあって自分が激しい霊的戦いの中に置かれている、という自覚はありますか？

この世において、私たちが日々霊的葛藤を覚えるのは、私たち自身の弱さゆえですが、でもそれは、同時に悪魔が私たちの信仰を本物だと認めているからでもあります。もしそうでなければ、この魔よけ祈祷師たちのように、悪魔は私たちのことを知る必要はないのです。信仰がなければ、それは主から離れた状態、つまり、救いを受けてない、滅びに至る状態を意味しているからです。ですから、そんな人をあえて知る必要も、誘惑する必要もありません。でも、主を信じ、主と共に歩む者に対しては、悪魔はあらゆる攻撃をしかけて下さるのです。それは一人でも多く、自分と同じ目に、つまり、滅びへと至らせるためです。

でも、その攻撃がいかに激しくとも、それによって私たち自身は、傷つき、弱ることがあっても、主イエスは悪魔よりも強いお方、そして、ご自分に属する者を主が守って下さるので、誰も主から私たちを引き離すことはできない。むしろ、自分の弱さを知り、自分のうちに何の望みも誇りも持てなくなるならば、私たちは主により頼むようになります。そして、その歩みを通して、主の恵みがいかに私たちの想像を遥かに超えて大きく、またすばらしいものであるかを味わい知るようになるのです。そのことのゆえに、主の御名をあがめずにはおられなくなります。

主イエスは、実にそのことのために来て下さいました。過去における私たちの罪だけでなく、現在も、また未来における罪さえも、すべてご自分が代わりに背負って下さることで、主は罪人の代表として、神のさばきを受け、十字架の死による贖いのわざを成し遂げて下さったのです。主は罪は犯されませんでした。ご自分が人としての弱さを抱え、悪魔の試みを受けられたので、今の時、悪魔に試みられている私たちをあわれみ、また助けて下さいます。この悪霊の事件を通して、ご自身の栄光、その力を証された主は、ご自身のもとに信仰をもって近づく者に、またその人を通して、ご自身の栄光を現わされます。私たちが主の御名をあがめ、主を愛し、信頼するゆえに、主に心から従うようになるためです。